

学籍番号：184016 名 前：加藤 要 Kaname,KATO

研 究 室：中村研究室

2021 長岡造形大学 美術・工芸学科クラフトデザインコース 卒業研究 I

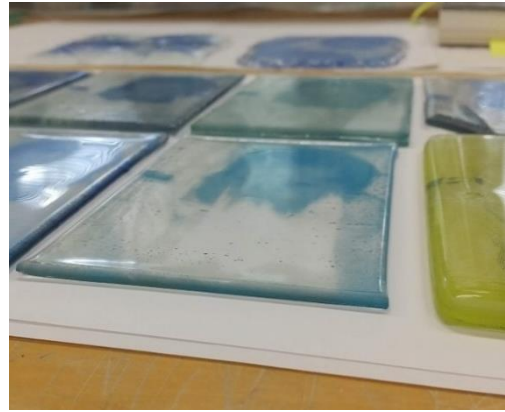
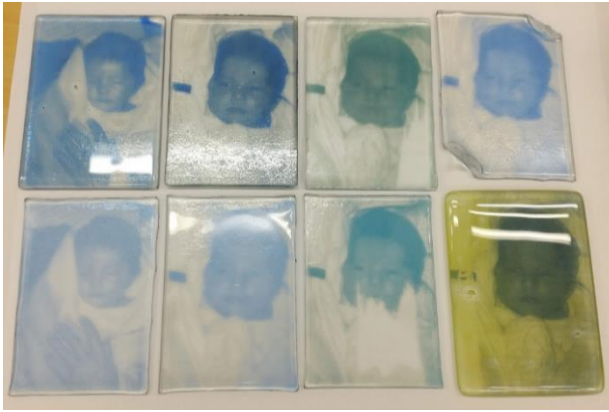
研究テーマ 「アルバムの中の私と現在の私を繋げる」

○テーマ設定

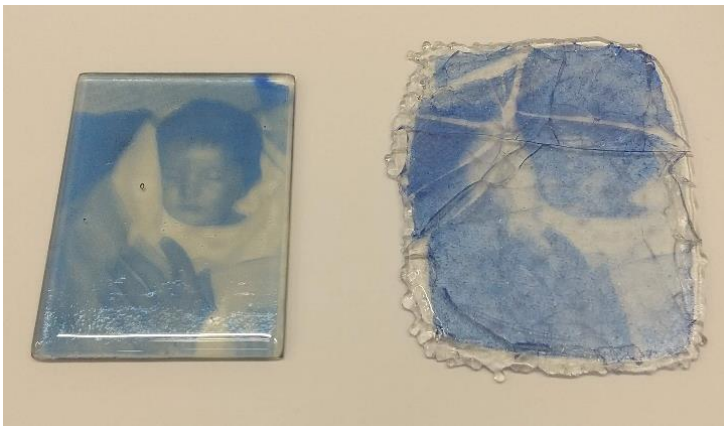
私は自分の幼少期のアルバムを見て、写真に写っている自分を私として認識することに違和感があると感じた。それは、当時の記憶がないことや幼少期の見た目が今と違うこと等がその違和感の原因だと考えている。その感覚を持ったことで、アルバムは幼い頃の自分の思い出を私の代わりに記録してくれている媒体であるように感じているものの、現在はせっかく記録したものが自分の思い出だと思えないような状態になっている。そこで、アルバムの中の写真を過去の自分の写真として受け入れ、アルバムの中の私と現在の私を繋げることをテーマに設定した。ガラスで制作する理由としては、アルバムの写真とガラスに似た部分があると考えたからだ。ガラスは、作品制作の際に窯に入れて焼成するので、自分の手を加えられない時間がある。そのような時間が、アルバムの写真の撮影された時から成長して見返すまでの時間と繋がるのではないかと考え、ガラスを用いて研究を行った。

○中間時の進行状況

まず幼少期のアルバムの写真と現在の写真とで何が違うのかを考え、その差を埋めようと考えた。アルバムの写真の現在の写真との最も大きな差は「私自身の意思が加わっていないこと」だと考えている。アルバムの写真は家族が写真を撮り、印刷し、まとめているのに対して、現在の写真は撮影、アップロード、フォルダにまとめるなどのほとんどの段階を自分で行っている。そこで、アルバムの写真を自分で読み込んで出力し、作品にすることで、現在の写真に対する感情と同じ感情をアルバムの写真にも向けられるのではないかと考えた。私は今現在自分が専門としていて好きなものでもあるガラスでそれを行うことでより自分の意思を加えられるのではないかと考え、紙の写真をガラスに置き換えることを制作に取り入れようと考えている。そこで、実験としてシルクスクリーンを用い、板ガラスにエナメル塗料を焼き付けた。また、現在の写真の加工に繋がるものがあるのではないかと考え、その焼き付けたものを割ったり、もう一度熱して曲げたりといった実験もした。



シルクスクリーンでエナメル塗料を焼き付けたガラス



上記のガラスを割り、もう一度焼成したもの

○中間時の成果

ガラスに置き換えた写真は焼き付けても形が崩れたりせず、写真としての機能は果たせているものになった。加工したのもガラス特有の表現が出来ていて技法としては面白いのではないかと考えた。しかし、それを見ても想像よりも親近感は感じられず、アルバムの中の写真を過去の自分の写真として受け入れられたとは言えなかった。

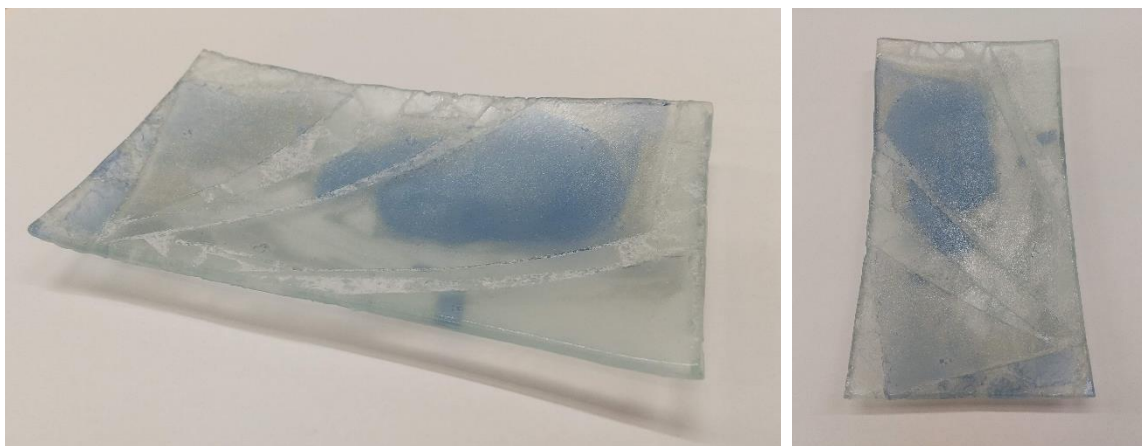
○成果から考えたこと

前述した通りに、私自身の意思を加えて制作を試みたが、それでも納得できなかったということは、自分の写真として認識するための重要なポイントが他にもあるということだと考えられる。そこでいくつかの文献を読み、写真の歴史や現在の写真と過去の写真の違いなどについて調べた。その中でロラン・バルトが肖像写真をめぐる経験を「四人の私」への分裂状態と説明して、「私が自分はそうであると思っている人間、私が人からそうであると思われたい人間、写真家が私はそうであると思っている人間、写真家はその技量を示すために利用する人間」(*a) のことであるといった部分が自分の研究に重なると思った。幼少期の写真であること、写真家ではなく家族が撮った写真であることを踏まえて考えると、私が

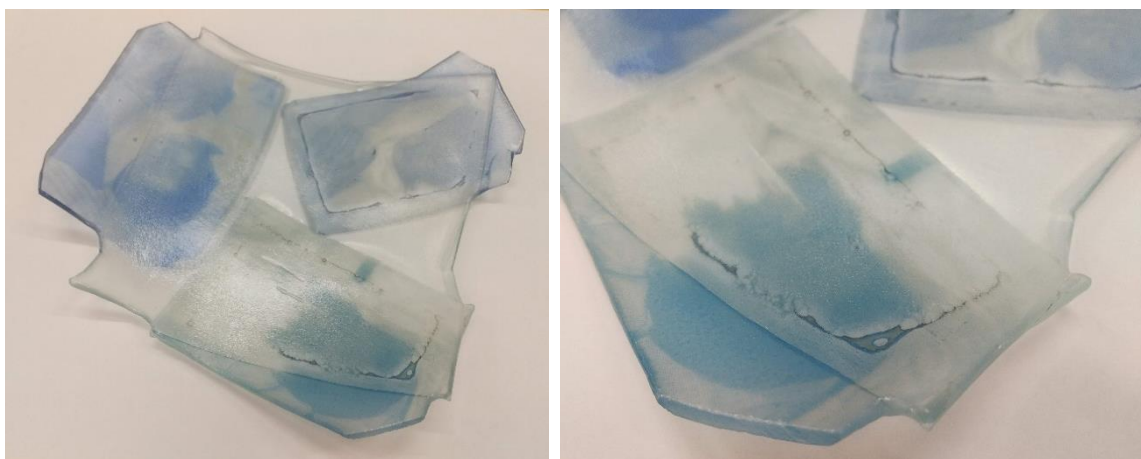
アルバムの写真を自分として受け入れられないのは、アルバムの写真の私は「写真家が私はそうであると思っている人間」であり、「私が自分はそうであると思っている人間」と一致しないからなのではないかと考えた。つまり、アルバムの中の私と現在の私の一致している部分（見た目、行動、環境等）を見つけ、それを強調することでアルバムの中の私を過去の自分として受け入れ、納得することができるという考えだ。

○中間後の進行状況

中間での成果を受けて、アルバムの写真を使って器を作ることを考えた。「食べる」という行為は「記憶のない過去から現在まで続いていること」であることに加え、「食べるのが好き」というのは家族が幼少期の私の話をする際に必ず出てくる話であり、現在の私と一致することでもある。また、器にはものを溜めるという根源的な使い道があるので、アルバムの中の写真の現在と一致していない部分、つまり「自分であるのに自分として認識できない」部分をアルバムと同じように保存することが出来るのではないかと考えた。このような部分がテーマに合っていることを理由に、「食べる」ということを強調できる器を考え、試作をした。



写真を割り、その間にガラスを詰め、スランピング技法を用いて器状に成形したもの



3枚の写真の上に板ガラスを置き、熱を加えて接着したもの



食事に関する写真を焼き付け、器状にしたもの

○試作から得た成果

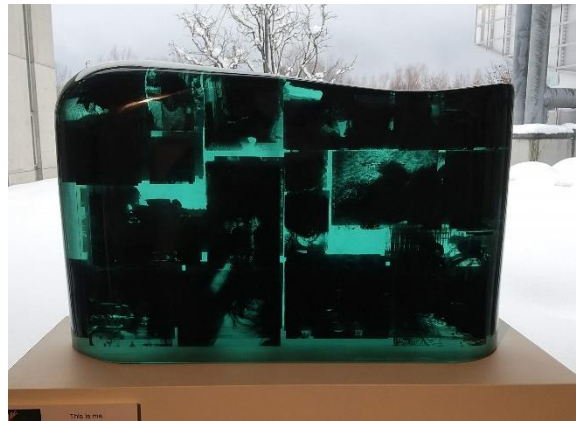
食事をしている写真を使うことで、「食べる」という要素は充分強調できると分かった。しかし、「溜める」という要素はあまり伝わらないものとなった。ただ食べている写真を並べただけに感じてしまう原因はそこにあるのではないかと考えた。

○成果から考えたこと

まだ「溜める」という部分が十分に表現できていないことが成果から分かった。そこで「溜める」の意味を改めて調べたところ、「集めたものを減らさずに取っておく。集めたくわえる。」というようなものだった。それはアルバムの機能にも近いものがあるのではないかと気が付いた。「溜める」というところから器とアルバムの持つ共通点を見つけたのである。このことから、これまでは「自分として認識できない部分」を溜めるという抽象的な考えだけだったが、アルバムのように「写真」を溜めるという考えも加えて作品にしようと考えた。

○最終成果

これまでの研究を踏まえ、「食べる」を強調できることと「溜める」という機能を持っていることから、器を制作した。「食べる」ということは食事をしている写真を使うことで強調した。「溜める」という部分は、アルバムと同じように写真を保存することで表現しようと考え、ガラスを積層させ、写真を内包する形にした。



作品名「This is me.」

技法：シルクスクリーン、ガラス積層

この一年間の研究を通して、自分の内面と向き合い、問題解決に近づけたのではないかと考える。受け入れることができなかつた幼少期の写真をガラスに置き換え器にした結果、その器が、アルバムの中の私と現在の私を繋げる媒体としての機能を果たしたのである。今後は、この作品を展示することで、自分以外の他者ともコミュニケーションを重ねながら、社会の中での見え方や役割等を見出すことにより、これから先の生き方に影響する未来の新しいステップに役立てられる研究に昇華できれば良いと考えている。

《引用文献》

(*a) ロラン・バルト『明るい部屋—写真についての覚書』
花輪光訳、みすず書房、1985年、23頁

《参考文献》

『インスタグラムと現代視覚文化論 レフ・マノヴィッチのカルチュラル・アナリティクスをめぐって』
共訳・編著：久保田晃弘・きりとりめでる、収録論文：レフ・マノヴィッチ、甲斐義明、芝尾幸一郎、筒井淳也、永田康祐、ばるぼら、前川修、増田展大
株式会社ビー・エヌ・エヌ新社、2018年